この命をどう使い切るか。
ついに志を立てる時がきた。

誰よりも熱く、誰よりも冷静だった天才思想家

PROLOGUE

SHOIN
YOSHIDA

PROLOGUE

かつて吉田松陰ほど型破りな日本人はいただろうか。

時代は、鎖国のまっただなか。

日本がかたくなに孤立状態をつづける一方で、アジアは次から次へと欧米諸国の植民地になっていた。

あの強かった清（中国）までも、西洋化の巨大な波に呑まれて、諸外国に道をゆずりながら生き延びようとしていた。

日本にも転機がやってくる。一八五三年、ペリーが黒船を連れてやってきたときのことである（この事件から明治維新までを〝幕末〟という）。

開国させるためには、圧倒的な技術力の違いを実際に見せつけるのがいいだろう。そう考えたペリーがいきなり大砲三発を威嚇発射すると、江戸（東京）はまさに天地がひっくり返るような騒ぎになった。そのとき江戸幕府と言えば、すっかり沈黙してしまっている。

刀じゃ大砲に勝てるはずがない。日本はもうおしまいだ。武士から農民まで誰もがそう確信し、眠れない夜がつづく中でただひとり、西洋を追い抜いてやろうと意

気込んでいる若者がいた。

吉田松陰、二十五歳。

兵法の専門家であった彼は、しばらく「どうやって西洋を倒そうか」虎視眈々と作戦を立てていた。だが実際に黒船の大砲を目にすると、急にこんなことを思いはじめた。

これは勝てない。

松陰の頭の切り替えは早かった。

いくら敵意を燃やしたって、日本を守ることはできないのだから、むしろ外国のやり方を学んだ方がいい

発想を逆にしてしまったのだ。

鎖国である。海外渡航などすれば、もちろん死刑である。

だが松陰はそんなことは気にしない。

翌年、再び黒船がやってくると、「日本にとって今なにが一番大事なのか」を明らかにし、すぐさま思い切った行動に出た。

松陰はこう言い残している。

PROLOGUE

今ここで海を渡ることが禁じられているのは、たかだか江戸の二五〇年の常識に過ぎない。

今回の事件は、日本の今後三〇〇〇年の歴史にかかわることだ。くだらない常識に縛られ、日本が沈むのを傍観することは我慢ならなかった。

彼はすばらしい戦略家だったが、こういうときはろくに計画も立てなかった。「動けば道は開ける！」とばかりに、小舟を盗むと、荒波の中をこぎ出していって、そのまま黒船の甲板に乗り込んだ。

突然の東洋人の訪問に、アメリカ艦隊は驚いた。

無防備な侍が、法を犯し、命がけで「学ばせてくれ」と挑んでくる。その覚悟と好奇心の異常ぶりを恐れたのだ。同時に、日本の底力を思い知った。

そして吉田松陰のこの小さな一歩が、後の「明治維新」という大きな波を生むことになる。

松陰は生まれたときから空気のように存在していた「しきたり」を破り、行動をもって自分の信念を貫くことをよしとした。

そんな情熱家である一方、松陰は大変な勉強家でもあった。

旅をしながらでも本を読み、牢獄に入れられても読みつづけた。

それもただ黙々と読むのではない。人物伝を読みながら、その人物の清い態度に号泣し、軽率な行動に激怒し、華々しい活躍に踊りあがった。

頭ではなく、感情で学ぼうとする男だった。まるで子どもである。だからこそ学んだことが、ストレートに行動へつながったのかもしれない。

密航で捕まった後の松陰は、江戸から故郷の長州藩（山口県）萩へと送られた。

そしていつ出られるかもわからない牢獄の中で、松陰はそこにいる囚人たちを弟子にすることになる。

すでに何十年と牢獄の中にいる人もいた。生まれたときから、すでに生きる希望を失っているような人も多かった。だが、松陰は身分や出身によって人を選ぶことなく、一人ひとりから才能を見つけようと親身になった。

仮釈放されると、松下村（まつもと）という小さな村で塾をはじめることになる。これが後に

PROLOGUE

伝説となったかの「松下村塾」である。

当時、長州藩には「明倫館」という藩校があり、そこには藩から選ばれた優秀な武士の子どもが集められ、一流の教師がついて、一流の教科書が用意された。

だが下級武士の子どもが集まる松下村塾に教科書はなく、まともな校舎すらなかった。

だから教科書は夜を徹して、弟子といっしょに書き写し、校舎も弟子たちとの手作りで最低限のものをこしらえた。

十畳と八畳の二間しかない塾。

そこで、吉田松陰が教えた期間はわずか二年半である。

そんな松下村塾が、かの高杉晋作や伊藤博文（初代総理）をはじめとして、品川弥二郎（内務大臣）、山縣有朋（第三代／第九代総理）、山田顕義（國學院大學と日本大学の創設者）を送り出した。結果的には、総理大臣二名、国務大臣七名、大学の創設者二名、というとんでもない数のエリートが、「松下村塾出身」となった。

こんな塾は世界でも類を見ない。

松陰はなぜこんな教育ができたのだろうか。

松陰は「いかに生きるかという志さえ立たせることができれば、人生そのものが学問に変わり、あとは生徒が勝手に学んでくれる」と信じていた。

だから一人ひとりを弟子ではなく友人として扱い、お互いの目標について同じ目線で真剣に語り合い、入塾を希望する少年には「教える、というようなことはできませんが、ともに勉強しましょう」と話したという。

教育は、知識だけを伝えても意味はない。

教える者の生き方が、学ぶ者を感化して、はじめてその成果が得られる。

そんな松陰の姿勢が、日本を変える人材を生んだ。

松陰はただの教育者では終わらない。

幕府の大老・井伊直弼（いいなおすけ）と老中・間部詮勝（まべあきかつ）のやり方に憤慨した松陰は、長州藩に「間部を暗殺したいので、暗殺に使う武器を提供してほしい」と頼み込んだ。驚いた長州藩は、また松陰を牢獄に入れることになる。

次第に過激さを増していく吉田松陰。

それに対し、松下村塾の弟子たちは血判状を出して懸命に止めようとしたが、松

PROLOGUE

陰はさらにその弟子たちとも縁を切ってしまう。

そしてある疑いで幕府の役人に取り調べを受けたとき、松陰は聞かれてもいない「間部詮勝の暗殺計画」を自分から暴露する。

当時、一介の武士が幕府の役人に意見ができる機会はめったになかったため、暗殺計画を告白することで、自分の考えを伝えるチャンスを得ようとしたのかもしれない。

だが結果的にその機会を得ることはなかった。松陰は捕まり、かの「安政の大獄」の犠牲者になった。

吉田松陰はこうして三〇歳でその生涯を閉じる。

若すぎる死。

一方で、松陰の志は生き続けた。

松下村塾の弟子たち、そしてその意志を継いだ志士たちが、史上最大の改革である明治維新をおこし、今にいたる豊かな近代国家を創り上げたのだ。

英雄たちを感化した、松陰の教えはシンプルで力強い。

学者でありながら、てらいや見栄、観念的なことをとことん嫌ったからだろう。

逆境にあるときほど、そんな思想が大きな力になることもある。

本当に後悔しない生き方とは一体なにか。この本を媒介として、ともに考えられたら嬉しく思う。

池田貴将

目次

PROLOGUE　誰よりも熱く、誰よりも冷静だった天才思想家　3

心

MIND

001　結果じゃない　28
002　やり切るまで手を離すな　29
003　本当に幸せな人　30
004　懇願　32
005　ためて一気に吐き出す　33
006　そこに未来がある　34
007　後ろを見ない　35
008　なにを選ぶか、どう選ぶか　36
009　逆境に礼を言う　37
010　自分はどうあるべきか　38
011　運が向かない人の考え方　39
012　頭と心の関係　40

CONTENTS
SHOIN YOSHIDA

013　この世の恩に報いる　42
014　不安のない生き方　43
015　また会いたくなる人　44
016　見失ったときに立ち返る　45
017　感動は逃げやすい　46
018　死ぬ気とはなにか　47
019　甘えを捨てろ　48
020　流れを変えるのは自分の行動　49
021　夢を引き継ぐ者　50
022　失敗の定義は無数　52
023　小さな肉体、無限の心　53
024　好かれようとせずに尽くす　54
025　非凡にとっての普通　55
026　最高の一文字　56
027　満たされるために　57
028　やればわかる　58
029　やる恥やらない恥　59

CONTENTS
SHOIN YOSHIDA

030 わかっているふりの怖さ 60
031 不器用の利点 61
032 胸躍らせる存在 62
033 誰にでもある時期 63
034 行動力を生む心がけ 64
035 恥ずかしいこと 65
036 感情が人生 66
037 心を向ける先 67
038 余計なことは考えない 68
039 なんでもやってみる 69
040 得を考えるのが損 70
041 誇りを見直す 71

士 LEADER-SHIP

042 迷わない生き方 76
043 自分にしか守れないもの 77
044 なにを優先し、なにを後回しにすべきか 78
045 「他人事」の空気に呑まれない 79
046 やる勇気よりもまかせる勇気 80
047 どうなったって平気 81
048 チームワークの本質 82
049 人物 83
050 まとっている空気感 84
051 足並みが揃うのを待たず、自分から走り出せ 85
052 いつでも死ねる生き方 86
053 偉いから、堂々としているわけじゃない 88
054 士である証拠 89
055 丸くなりたくない人へ 90
056 あの人の態度が清いのは 91
057 輪の中にいると見えなくなる 92
058 まっすぐに生きる方法 93
059 人をみきわめる 94

CONTENTS
SHOIN YOSHIDA

060 自分と向き合うとき 95
061 重い責任 96
062 聖人の「こだわらなさ」を知る 98
063 人に影響を与えられる人 100
064 上が下に接する態度 101
065 リーダーをきわめる道 102
066 熱い生き方 104
067 話し合いの本当の目的 105
068 心をつなぐ 106
069 上に立つ人間の日常 107
070 計画を立てる前の儀式 108
071 すべての力は中心へ 109
072 すぐに育つものはない 110
073 先駆者の思考 111
074 腹が据わっている人のおまじない 112
075 ミスを認め、失敗を責める 113
076 使える部下がいないという勘違い 114

志
VISION

077 隠しきれるものじゃない 115
078 本気の志 120
079 短期で求めない 121
080 未来のために 122
081 知らないものを味わう 123
082 いけるときは今しかない 124
083 人である意味 125
084 時代に新しい風を吹かす 126
085 ひとつのことに狂え 127
086 どう生きたいか 128
087 うまいメシを喰うために 129
088 自分の夢にとどまらずみんなの夢に 130

CONTENTS
SHOIN YOSHIDA

知
WISDOM

089 限界は何度だって超える 131
090 無尽蔵に掘り出せるもの 132
091 ことのはじまり 134
092 心の声を見つけろ 136
093 嘆かなくていい 137
094 大事と小事 138
095 空は見ている 139
096 偉人たちの夢 140
097 思い出すべきこと 141
098 その先には愛がある 142
099 欲しいものはすでに持っている 143
100 埋められないもの 144
101 成功者の法則 145
102 憧れの人の精神をつなぐ 146
103 日本人である幸せ 147
104 失敗するほど燃え上がる 148
105 宇宙の原理 149
106 ここからはじまる 150
107 役割が人を作る 151
108 恥ずかしがらずに手を差し伸べる 152
109 凡人の評価 153
110 ときめくものがないと嘆く前に 154
111 壁を楽しめるかどうか 155
112 やってきたことのペースを守る 156
113 初心の価値 157
114 思い込みを疑え 162
115 調べるよりも聞こう 163
116 学ぶならとことんまで 164
117 体験するまでは虚像 165
118 自分を磨くため 166

CONTENTS
SHOIN YOSHIDA

119 読書の心得 167
120 二種類の生き方 168
121 学び上手な人 170
122 学びの賞味期限 171
123 今の人と昔の人 172
124 ヒントを無駄にするな 174
125 行き詰まったときにはいずれかを 175
126 本の持つ力 176
127 時間は矢のごとく 178
128 我流でやらない 179
129 惜しみなく教え、頭を下げる 180
130 勝つ人と勝ち続ける人 181
131 情報をむさぼるな 182
132 未知なるものの価値 183
133 知識だけあっても尊敬されない 184
134 本質を知る 185
135 学ぶとは思い出すこと 186

友
FELLOW

136 知識と行動 187
137 長所を引き立てるために 188
138 確かめるまでは語らない 189
139 知識を血肉とするには 190
140 学者と武士 191
141 再開すれば、それも継続 192
142 勝因はどこにあったか 193
143 大きな心を持つには 198
144 問題に取り組む前に 199
145 集団の中で生きる 200
146 力が目覚めるとき 202
147 仲間を助ける 203
148 志を合わせる 204

CONTENTS
SHOIN YOSHIDA

149 やさしさとはなにか 205
150 嫌な人は鏡 206
151 人に教えるイメージ 208
152 お互いの誇りを尊重する 209
153 駄目なものに尽くすこそ価値がある 210
154 人が動物と違う理由 212
155 出世するほど大事にすべきこと 213
156 信じて疑わない 214
157 この世の仕組み 215
158 人生は目に宿る 216
159 出会いと別れ 217
160 聖者にはなれないが 218
161 どう見いだすか 219
162 磨けばいつでも光る 220
163 認められる順番 221
164 人同士の法則 222
165 やるならとことんまで 223

死

SPIRIT

166 止まることは許されない 228
167 最後の宿題 229
168 壊すのか、守るのか 230
169 命の重さ 231
170 動物ではなく人間として 232
171 死を想え 233
172 自分はどこからやってきたのか 234
173 大切な人のために今日できること 235
174 人生は四季を巡る 236
175 祖先を想え 240
176 辞世の句 241

心

MIND

SHOIN
YOSHIDA

歳月は齢と共にすたるれど
崩れぬものは大和魂

松陰からの学び一
動きながら準備する

やろう、とひらめく。
そのとき「いまやろう」と腰を上げるか、「そのうちに」といったん忘れるか。
やろうと思ったときに、なにかきっかけとなる行動を起こす。それができない人は、いつになってもはじめることができない。むしろ次第に「まだ準備ができていない」という思い込みの方が強くなっていく。
いつの日か、十分な知識、道具、技術、資金、やろうという気力、いけるという予感、やりきれる体力、そのすべてが完璧にそろう時期がくると、信じてしまうのだ。
だがいくら準備をしても、それらが事の成否を決めることはない。
いかに素早く一歩目を踏み出せるか。いかに多くの問題点に気づけるか。いかに丁寧に改善できるか。少しでも成功に近づけるために、できることはそ

の工夫しかない。
よく行動する人は、知識は必要最低限でいいと考える。
なぜなら実際に動く前に、わかることなんてほとんどないと知っているからである。
だからよく失敗する。だがそれで「順調」だと思っている。
そのように私たちの脳は、自分の行動をうまく正当化するようにつくられている。
小さくても、「一歩を踏み出す」という行為さえ続けていれば、「なぜこれが正しいのか」脳が勝手に理由を集めてくれる。
吉田松陰は、行動につながらない学問は無意味だと考えた。
大切なのは、不安をなくすことではない。
いかに早く、多くの失敗を重ねることができるか。
そして「未来はいくらでも自分の手で生み出すことができる」という自信を、休むことなく生み続けることなのである。

001

結果じゃない

大事なことは、
なにを、どう手に入れるかではなく
どんな気持ちを感じたいかなのです。
たとえ手に入れたものが、どれだけ美しくて広い家だとしても、
住んでいる人がやさしい気持ちになれないのなら、
それは貧しい人生です。

002

やり切るまで手を離すな

たいていの人はまだ序の口で、
いよいよこれからが本番だというときに、
自分の田んぼを放置して、
人の田んぼの雑草を取りたがるのです。
人の田んぼの雑草を取るというのなら、
まだいい方かもしれません。
一番多いのは、人が懸命に草を取っている姿を傍観して、
その取り方がいいとか悪いとか、批評ばかりしている人です。
まずは自分が今いるところからはじめましょう。
人生の喜びを十分に味わうために。